

融

詞章

登場人物

前シテ・老翁
ワキ・旅僧

後シテ・源融の霊
間狂言・所の者

ワキ

これは諸国一見の僧にて候。我未だ都を見ず候程に。只今都へ上り候。思ひ立つ心ぞしるべ雲を分け。船路を渡り山を越え。千里も同じ一足に。千里も同じ一足に。夕べを重ね朝毎の。夕べを重ね朝毎の宿の名残も重なりて。都に早く着きにけり。都に早く着きにけり。

シテ

月もはや。出潮になりて塩釜の。うら寂びまさる夕べかな。

陸奥はいづくはあれど塩釜の。恨みて渡る老が身の。寄るべもいさや定無き。心も澄める水の面に。照る月なみを数ふれば。今宵ぞ秋の最中なる。げにや移せば塩釜の。月も都の最中かな。秋は半ば身は已に老い重なりて諸白髪。雪とのみ積りぞ来ぬる年月の。積りぞ来ぬる年月の。春を迎へ秋を添へ。時雨るる松の風までも。我が身の上と汲みて知る。汐慣衣袖寒き。浦曲の秋の夕べかな。浦曲の秋の夕べかな。暫く休まばやと思ひ候。

ワキ

いかに尉殿。御身は此のあたりの人にてましますか。

シテ

さん候此処の汐汲にて候。

ワキ

不思議やここは海辺にても無きに。汐汲とは誤りたるか尉殿。

シテ

あら何ともなや。さてここをばいづくと知ろし召されて候ぞ。

ワキ

さん候此処を人に問えば。六條河原の院とかや申し候よ。

シテ

されば其の河原の院こそ塩釜の浦候よ。陸奥の千賀の塩釜を写されたる。都の内の海辺なれば。名に流れたる河原の院の。河水をも汲め池水をも汲め。ここ塩釜の浦人ならば。汐汲などと思さぬぞや。

ワキ

げにげに陸奥の千賀の塩釜を。都の内に写されたるとは承り及びて候。さてあれなるは籬が島候か。

シテ

さん候あれこそ籬が島候よ。融の大臣常は御舟を寄せられ。御酒宴の遊舞様々なりし所なり。や。月こそ出でて候へ。

ワキ

げにげに月の出でて候ぞや。面白やあの籬が島の森の梢に。鳥の宿し囀りて。しもんにうつる月影までも。孤舟に帰る身の上かと。思ひ出でられて候。

シテ

只今の面前の景色を。遠き故人の心まで。お僧の御身に知らるるとは。もしも賈島が詞やらん。鳥は宿す池中の木。

ワキ

僧は敲く月下の門。

シテ

推すも。

ワキ

敲くも。

シ・ワ

故人の心。今目前の秋暮にあり。

同音

げにや古も月には千賀の塩釜の。月には千賀の塩釜の。浦曲の秋も半ばにて。松風も立つなりや霧の籬の島隠れ。いざ我も立渡り。昔の後を陸奥の。千賀の浦曲を眺めんや。千賀の浦曲を眺めん。

ワキ

尚々千賀の塩釜を。都の内に写されたる謂はれを御物語り候へ。

シテ

語って聞かせ申し候べし。

昔嵯峨の天皇の御宇に。融の大臣と申しし人。陸奥の千賀の塩釜の眺望を聞こし召し及ばせ給ひ。あの難波の御津の浦よりも。日毎に潮を

陸奥はいづくはあれど
塩釜の 浦漕ぐ船の綱
手かなしも 古今集東
歌 水の面に照る月
なみを数ふれば 今宵
ぞ秋の最中なりける 〓
拾遺集源順の歌
諸白髪 〓 総白髪

千賀の塩釜 〓 千賀の浦
は塩釜の国府津でしば
しば塩釜に冠される

籬が島 〓 塩釜の沖にあ
るとされる島 (我が背
子を都にやりて塩釜の
籬の島に待つぞ悲し
き 〓 古今集)

しもん・孤船 〓 不祥
賈島 〓 唐代の詩人。第
李凝幽居という詩を引
いた。

今目前の秋暮にあり 〓
今の目の前の景色がこ
故人の読んだ詩意その
ままである

げにや古も月には千賀
の塩釜の 〓 遠い昔のこ
とも昔に変わらぬ月影
さを見れば近きことの

汲ませ。ここに塩を焼かせつつ。一生御遊の便りとし給ふ。其後は相續して甞ぶ人も無ければ。浦は其俣干汐となつて。池辺に澱む溜り水は。雨の残りの古き江に。落葉散り浮く松蔭の。月だに澄まで秋の風。音のみ残るばかりなり。されば歌にも。

君まさで煙絶えにし塩釜の
うら寂しくも見え渡るかな

と。貫之も詠めて候。

同音 げにや眺むれば。月のみ満てる塩釜の。うら寂しくも荒れ果つる。跡の世までも汐じみて。老の波も返るやらん。あら昔恋しや。恋しや恋しやと慕へども願へども。かひも渚の浦千鳥。音をのみ鳴くばかりなり。音をのみ鳴くばかりなり。

ワキ 只今の御物語に落涙仕りて候。さて見え渡りたる山々は皆名所にて候か。

シテ さん候皆名所にて候。お尋ね候へ答へ申し候はん。

ワキ まづあれに見えたるは音羽山候か。

シテ さん候あれこそ音羽山候よ。

ワキ さては音羽山。音に聞きつつ逢坂の。関のこなたにと詠みたれば。逢坂山も程近うこそ候らめ。

シテ 仰の如く関のこなたにとは詠みたれども。あなたに当れば逢坂の。山は音羽の峯に隠れて。此の辺よりは見えぬなり。

ワキ さてさて音羽の峯続き。次第次第の山並の。名所名所を語り給へ。語りも尽さじ言の葉や。歌の中山清閑寺。今熊野とはあれぞかし。

ワキ さて其の末に続きたる里一村の森の木立。

シテ それをしるべに御覧ぜよ。時雨れも敢へぬ秋なれば。紅葉も青き稻荷山。風も暮れ行く雲の端の梢にしるき秋の色。

シテ 今こそ秋よ名にしおふ。春は花見し藤の森。

ワキ 緑の空も影深き野山に続く里はいかに。

シテ あれこそ夕ざれば。

ワキ 野辺の秋風。

シテ 身に沁みて。

ワキ 鶉鳴くなる。

シテ 深草山よ。

同音 木幡山伏見の竹田淀鳥羽も見えたりや。眺めやるそなたの空は白雲の。はや暮れそむる遠山の。峯も木深く見えたるは如何なる所なるらん。

シテ あれこそ大原や。小塩の山も今日こそは。御覧じそめつらめ。尚々問はせ給へや。

同音 聞くに付けても秋の風。吹く方なれや峯続き。西に見ゆるはいづくぞ。秋もはや。秋もはや。半ば更け行く松の尾の。嵐山も見えたり。

同音 嵐更け行く秋の夜の。空澄み昇る月影に。

シテ さす潮時もはや過ぎて。

同音 隙もおし照る月に賞で。

シテ 興に乗じて。

同音 身をばげに。忘れたり秋の夜の。長物語よしなや。まづいざや汐を汲

ように思われるの意
嗟峨天皇 桓武天皇の
第二皇子。先代平城天
皇の弟 難波の御津 皇
古来より難波津と呼ば
れる浦のこと。

君まさで 古今集紀貫
之の歌。「河原左大臣み
まかりて後、かの家に
まかりてありけるに塩
釜という所のさまを作
れりけるを見てよめる」
とある

音羽山音に聞きつつ逢
坂の せきのこなたに
年をふるかな 古今集
有原元方

夕ざれば野辺の秋風身
にしみて 鶉なくなる
深草の里 千載集藤原
俊成

あれこそ大原や 大原
野のこと。(大原や小塩
の山も今日こそは 神
代のことも思ひ出づら
め 古今集在原業平)

まんとて。持つや田子の浦。東褰（からげ）の夕衣。汲めば月をも袖に望汐の。汀に帰る浪の夜の。老人と見えつるが汐曇にかき紛れて。跡も見えずなりにけり。跡をも見せずなりにけり。

中入

ワキ 磯枕苔の衣を片敷きて。苔の衣を片敷きて。岩根の床に夜もすがら。

シテ 猶も奇特を見るべしと。夢待ち顔の旅寝かな。夢待ち顔の旅寝かな。

シテ 忘れて年を経しものを。又古に帰る浪の。満つ塩釜の名にしおふ。今

宵の月を陸奥の。千賀の浦曲の遠き世に。其の名を遺す大臣。融の大

臣とは我が事なり。我塩釜心を移し。あの籬が島の松蔭に。名月に舟

を浮め月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月の色。千重降るや。雪を

廻らす雲の袖。

同音 さすや桂の枝々に。

シテ 光を花と散らすよそほひ。

同音 ここにも名に立つ白河の浪の。あら面白や曲水の盃。受けたり受けた

り遊舞の袖。

早舞

同音 あら面白の遊樂や。あら面白の遊樂や。そも名月の其中に。まだ初月

の宵々に。影も姿も少きは。如何なる謂はれなるらん。

シテ それは西岫に。入日の未だ近ければ。其の影に影に隠さる。譬へば

月の有る夜は。星の淡きが如くなり。

同音 青陽の春の初には。

シテ 霞む夕べの遠山。

同音 黛の色に三日月の。

シテ 影を舟にも譬へたり。

同音 又水中の遊魚は。

シテ 鉤と疑ひ。

同音 雲上の飛鳥は。

シテ 弓の影とも驚く。

同音 一輪も下らず。

シテ 萬水も上らず。

同音 鳥は池辺の樹に宿し。

シテ 魚は月下の浪に臥す。

同音 聞くとも飽かじ秋の夜の。

シテ 鳥も鳴き。

同音 鐘も聞えて。

シテ 月もはや。

同音 影傾きて明方の。雲となり雨となる。此の光陰に誘はれて。月の都に

入り給ふよそほひ。あら名残惜しの面影や。名残惜しの面影。

（喜多流謡本より）

なお当日の演出により詞章が異なる場合があります。

※同音とは地謡のこと。地謡は多くは八人で構成され、シテの演技を助けたり、ナレーションの役割を負う。